

「顔」という単語はヘブライ語ではパーニームですが、この語は旧約聖書全 39 巻のうちオバデヤ書を除く 38 巻で 2125 回も用いられる重要単語です。出エジプト記 33 章 1 節には「主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた」とあります。そこにこそ祝福と幸いの源泉があるのです。「愛の賛歌」と呼ばれるコリントの信徒への手紙 I 13 章 12 節でも完成された神の国における祝福の状況を「顔と顔を合わせて見る」と表現されています。この事実を教育に携わる私たちは、決して忘れてはならないのです。つまり、教師も職員も、それぞれの馳せ場で園児、生徒、学生、同僚と、顔と顔を合わせて見る関わりをしっかりと築いていかなければならないということではないでしょうか。



左の絵は 3 歳の孫が初めて自分の母親を描いたものです。私が父親の時には、このような絵を見ても「なんてへんてこりんな絵を描くのだろう」と思うのが関の山でした。ところが祖父という立場になると父親時代には思いもしなかった様々な気づきを与えられ、我ながら成長したものだと感じさせられます。と同時に、もう一度父親に戻って子育てに再挑戦できたら、以前よりはよほどまともな育児ができるのではないかと残念に思うのです。

この絵に関して孫が母親に話したところによれば、真ん中はお団子を持つお母さん、お母さんの頭から出ているのは鬼の角（怒られると怖いからでしょうか）、右下はお餅を持つ本人、そして左上の小さな小さな顔は妹だそうです。

私が興味深く思ったことは、胴体がうまく描かれず、顔から直接出てくるように腕や脚が描かれていることです。3 歳程度の幼児にとって、未だ人間は頭、首、胴、腕、腰、

脚という部位から成る存在とは認識はされていないようです。言い換えれば幼児の認識における身体とは、圧倒的に顔が中心となって捉えられているということではないでしょうか。考えてみれば当然のことだと思うのです。子どもたちは生まれた時から大抵お母さんとは、顔と顔、目と目を合わせるように間近で対話をしているからです。そんな時、子どもたちはお母さんの身体全体に注意を払うことはなく、お母さんの顔だけに神経を集中して愛のこもった語り掛けに聴き入り、言葉を獲得していきます。ですから、幼児の感覚の真実からすれば、「お母さん」は身体全体としてではなく、まずもって「大きな顔の人」として存在するのが自然な感覚なのではないでしょうか。

もしお母さんやお父さんが、顔と顔を合わせるように子どもたちと対話をしなければ、子どもたちは言語を獲得はもとより、豊かな心を養うこともできなくなるでしょう。言い換えれば人格の基礎をなす思考力、共感力、判断力を養うことができなくなるということです。それは又テレビの子ども番組、タブレットの教育ソフトに子守の多くの時間を委ねてしまうことの危険性にもつながります。テレビやタブレットの画面に出てくる登場人物は、それらしく振舞ってはいますが、決して子どもたちと生の対話をするのではなく、常に一方的に情報を与え、刺激を与える存在にすぎないからです。前にもご紹介したと思いますが、国立医療センター機構仙台病院小児科部長であった田澤雄作先生は、『メディアにむしばまれる子どもたち』のなかで、テレビ、タブレット、スマホ、ゲームなどの視聴覚媒体に子どもたちを長時間さらすと、前頭葉の発達に大きな影響を及ぼし、小中学生になってから不登校、情緒障害、慢性疲労をもたらす原因となると指摘しておられます。

教育の ICT 化が進む中で、様々な双方向性を担保する機器も開発されつつあります。しかし、教育の原点が、なによりも生身の人間が「顔と顔を合わせる」人格関係のなかにあることを宮城学院に連なる者は決して忘れてはなりません。なぜなら、そのことを抜きに「神を畏れ、隣人を愛する」人格を育む教育は全うすることができないからです。